ロンドン・スクールとフランクフルト学派
――1930年代のイギリス社会思想の一齣――†

田　中　秀　夫

はじめに

『経済学の本質と意義』で知られるライオネル・ロビンズ（1898–1984）が20世紀のイギリスを代表する経済学者の一人であるということには，誰しも異論はないであろう。ケインズのような華々しさはなく，むしろ誠実で凡庸という印象だが，彼は経済学を専門として，アカデミズム，戦時内閣，また戦後の政府の各種委員などの公職において，タフで幅広い活動を繰り広げた自由主義経済学者，公共的知識人である。ロンドン・スクール（LSE，正確にはロンドン経済・政治学校）の教授として，彼は，ハイエクをはじめとして多彩な研究者を世界各地から招くなどして，マーシャルとケインズのケンブリッジ大学とライヴァルともいうべき，独自の特色を持った経済学の拠点とすることに尽力し，また戦中から戦後にわたり半世紀ものあいだ，経済政策，芸術行政，大学改革などに倦むことなく貢献した。

筆者は，縁あって，ロビンズ卿の『一経済学者の自伝』（Lord Robbins, *Autobiography of an Economist*, Macmillan: St Martin's Press, 1971）の翻訳に関係した。ロビンズの伝記を書いたオブライエン（D. P. O'Brien）はロビンズの『自伝』を「素晴らしい」と述べている[1]が，評価は様々なようである。筆者は面白く思いながら，監訳の仕事に携わった。本稿は，その仕事の副産物である。

Ⅰ　フランクフルト学派の受け入れ問題

彼は自分と同時代の歴史を淡々と語っているが，その一節にフランクフルト学派の受け入れに関する次のような記述がある。

> ある午後，ナチスがドイツで権力を掌握してほどなく，私は，校長（ベヴァリッジ）の部屋に入ったが，経済学部門の小さな問題に関する話をするためであった。そのとき彼が，まったく満足しながら私に伝えたのは，次のようなことであった。すなわち，彼はある研究組織と実質的に協定を結んでしまっており，それはその組織の価値ある蔵書を我々に預ける代わりに，スクールの施設が与えられ，それを本部として利用する権限も与えられるというものであった。私は自分の耳を疑った。問題の組織は，ドイツにおけるマルクス主義の牙城として有名であった。ここにあったのは，公衆の目にはいずれにせよ，実質上の合併と思われることを，当の学術機関とまったく協議もせずに，実現するという提案であった。

これはフランクフルト学派の受け入れ案であった。ナチスの政権掌握後ほどなくというか

---

† 八木教授の退職記念号に教授の関心圏内にある主題について論稿を執筆できたことを幸いに思う。草稿に関して八木教授からコメントと教示を得たことも記しておきたい。

1） D. P. O'Brien, *Economic Journal*, 98, March 1988, p. 104.

ら1933年のことであったと思われる。スイスのジュネーヴ支部に避難していた社会研究所は，この時期になると，ジュネーヴでもファッシズムの脅威に晒される不安が兆し始め，より安全な引っ越し先を探さなければならなくなっていた。そこで翌年の2月に，フリードリヒ・ポロック（学派の経済学者で『ソヴィエト連邦における経済計画の実験1917-1927年』などの著者として知られる）がロンドンに出張して，ベヴァリッジ（校長の在位は1919-37年）とロンドンへの研究所の移転案についてひざ詰めの交渉を行った[2]。ベヴァリッジも『自伝』を残しているが，この件については一切記述がない。

信じがたいことであるが，ロビンズの記述が正しければ，ベヴァリッジは交渉を秘かに独断で進めようとしていた。スパイを恐れていたのであろうか。ロビンズの解釈では，ベヴァリッジは，学派の蔵書が欲しかったというのである。愛書狂であったラスキは相談を受けていたかもしれない。しかし，これにロビンズは反対した。それはなぜか。ロビンズが反対した理由はこう述べられている。

> 私は，ヒットラーから逃れていた個々のマルクス主義者に援助と避難所を提供するためなら，どんなことにも少しも反対ではなかった。私はその当時，亡命者支援活動に精を出していた。私はイデオロギー的な根拠から人を区別することを，決して夢にも見たことはない。

この時期のロビンズは「大学人支援会議」の一員としてナチスに抑圧された亡命者の支援活動に尽力していた。この会議は1933年の3月に，別々の用務でウィーンに出張していたロビンズ夫妻とベヴァリッジが，ミーゼスと一緒に，偶々ウィーンのカフェで雑談をしていたときに，夕刊でナチスが高名な指導的教授を追放したことを知ったことから，ロビンズとベヴァリッジが支援活動を思い立ったことに始まる[3]。ケンブリッジのラザフォード卿などの支援も得て，救援活動の開始と募金を呼びかけた会議の声明は著名な各分野の41名の署名を得て，5月24日の新聞に出た[4]。こうしてドイツ，オーストリアなどから幾人もの亡命知識人がLSEにやってきた。ハイエクがナチスの権力掌握を予想していち早くオーストリアを離れたことはよく知られているだろう。フランクフルト大学の社会学教授であったカール・マンハイム――彼はホルクハイマーの社会研究所と距離を置いていた――もまた，1933年にLSEの社会学講師となった。

> しかし，そのような評判の組織全体をロンドン・スクールと親密な連合関係にする提案は，まったく異なる性質の考慮をすべきものであった。それは，ロンドン・スクールが基礎としてきた原則とは，まったく異なるものの導入を伴っているかもしれなかった。またそれには，我々がいつも犯してきた，すべての無知な誤解を確証するように見える危険が，確かにあった。私がもっと恐れたのは，この友好関係の合意を具現する文書が，その日の夕方5時に署名されることになっていることを知った時であった。私は，これはもっとも真剣な協議と熟慮なしで進めるべき一歩ではない，と強く抗議した。

2）Martin Jay, *The Dialectical Imagination, A History of the Frankfurt School and the Institute of Social Research 1923-1950*, Little, Brown and Company, 1973, p. 37. 荒川幾男訳『弁証法的想像力』みすず書房，1975年，45-46ページ。ジェイによれば，LSE校長のベヴァリッジ，および社会学研究所のファーカースン（Farquharson）と彼の同僚たちが交渉に関係したというが，ロビンズの回想と異なっている。

3）Lord Beveridge, *Power and Influence*, London : Hodder and Stoughton, 1953, pp. 234-37.

ロビンズは組織の受け入れと個人の受け入れを峻別し，前者については反対であるが，少なくともまず慎重審議を必要とすると考えた。ロビンズは盟友ハイエクに相談した。

> ベヴァリッジは，この態度に非常に困惑した。なぜ私はためらわなかったのか？　私は，この重要な蔵書を事実上獲得することで，ロンドン・スクールにもたらされる巨大な利点を理解しなかったのだろうか？　私は自分の理由について説明し，問題の組織の基盤に関する自らの信念を確証するものとして，ハイエクの支援を求めた。ベヴァリッジはなおいっそう怒った。彼は，「自由主義的偏見」にまつわるきわめて多くの言葉を費やして，我々を非難した。

ベヴァリッジは，社会主義者として学派をほとんど無条件に受け入れることの正当性に確信を持っていたと推察される。しかし，結局はロビンズの主張が勝利した。

> 幸いにも，その時には，ロンドンにもっとも著名な人物のうちの何人かがいた。翌朝に開催された会議で，ハイエクと私が主張したすべてが確認され，ずっと多くのことが追加された。提案された提携が，彼と他のものがすでに試みていた救助作業を，必然的にどれほど複雑にするかが彼に説明された時の，ベヴァリッジの表情を私は忘れない。その日の終わりまでに，提案された提携は承諾できないという報せが関係者に伝えられた[5]。

ウィーン大学教授で，『社会主義史および労働運動雑誌』（グリュンベルクス・アルヒーフ）で知られるオーストロ・マルクス主義者，カール・グリュンベルクが初代所長に就任して 1923 年に創設されたフランクフルト社会研究所は，マルクス主義に立脚してはいたが，研究所の活動を政治活動に直結することを避け，またスターリンの率いるソ連と国際共産主義運動（コミンテルン）からも距離を置いていた。しかし，後に『中国の経済と社会』（1931 年）で知られるようになるウィットフォーゲルや，ボルケナウなどの若い所員たちは，共産党員となって公然と政治活動を行っていた。二人はやがて転向す

4）　声明の一部をベヴァリッジの自伝から引用しておこう。「……我々は解雇された教員と研究者を支援し，大学と科学機関で働く機会を彼らに見つけるために，それだけのためにではないけれども，主としてそのために使用するための募金をつのらなければならない。

我々はこの国の大学と他国の類似の目的で形成されつつある組織の両方と連絡をしなければならず，我々は同じ目的を目指すために，どんな行動であれそれをなしうる人々のための，入国許可・情報センターを設けなければならない。我々はいかなる方面からの協力の申し出も歓迎する。我々は学問の場の自由（academic freedom）と研究の安全に関心をもつすべての人からの寛大な支援を訴える。我々は例外的な訓練を受けた例外的な才能の浪費を防止するための手段を要請するものである。

現在提起されている問題はユダヤ人の問題だけではない。被害を受け脅威に晒されている多くの人はユダヤ人に関係がない。今ドイツで鋭く提起されているのであるが，問題はドイツに限られたものではない。我々は我々に委ねられるいかなる基金も，いかなる国であれ，宗教，政治的意見，あるいは人種を理由として，自国で仕事を続けられない大学教師と研究者のために利用できるものと見なしたい。

我々の行為はいかなる国の人々にも反友好的な感情を意味するものでもない。それは統治形態に関する判断も意味しないし，国々の間のいかなる政治的争点に関する判断も意味しない。我々の唯一の目的は苦難の救済であり学問と科学の擁護である。」Beveridge, *Power and Influence*, pp. 236–37.

5）　以上の引用は，Lord Robbins, *Autobiography of an Economist*, Macmillan : St Martin's Press, 1971, pp. 139–40. ライオネル・ロビンズ，田中秀夫監訳『一経済学者の自伝』ミネルヴァ書房，2009 年，150–52 ページ。

るのであるが，それはもう少し後である。

1930年にはホルクハイマーが35歳で所長に就き，研究所の華々しい第二期の活動が始まる。『アルヒーフ』は『社会研究年誌』に引き継がれ，社会分析に精神分析が導入された。しかし，こうした研究の高揚にもかかわらず，研究所はナチスの権力掌握によって亡命を余儀なくされ，ジュネーヴ支部に移動し，パリとロンドンにも支部を設け亡命時代に入っていく。レイモン・アロンはパリ支部の研究員となった。

政治活動によって逮捕されたウィットフォーゲルの釈放にはLSEのトーニーも尽力したらしい。ロンドンでは，『社会学評論』の編集者であったファーカースンが「ル・プレイ・ハウス」に数室を確保できると申し出て，ウェッブ，トーニー，モリス・ギンスバーグ，ラスキが賛同した。小さな事務所ができ1936年まで活動した[6]。ロビンズの語る提携案は実現しなかったが，社会研究所は小規模なロンドン支部を暫時，設けることができたのであった。

こうしたなかで，LSEには様々な左翼の影響力が浸透してきた。ロビンズに警戒感がなかったはずはない。個人的な亡命者の支援と，組織的な社会主義運動とを峻別しつつも，ロビンズとハイエクは，少なくとも意図としては，左翼勢力と戦って，LSEの自由主義の伝統を防衛しようとしたのである。しかし，彼らがフランクフルト学派をよく理解していたかどうかは疑問に思われる。

フランクフルト学派受け入れの一件に先立って，一説にはベヴァリッジは失敗をおかしていた。すなわち，彼は1923年に，社会科学研究の振興を支援していたロックフェラー財団（正確には「ローラ・スペルマン・ロックフェラー記念」）から50万ポンドの寄付を得る交渉を行い，それがロンドン・スクールの充実を可能にしたのであるが[7]，しかしベヴァリッジは資金を流用して大学の信用失墜を招いたらしい。ハイエクによれば[8]，新図書館の建設資金として獲得したものを，社会生物学者として知られるランスロット・ホグベン[9]の任用に使ったというのである。ロビンズはこの件には口を閉ざしているが，ベヴァリッジの自伝を読むと，ハイエクの主張が果たして正しいかどうか疑問の余地がある[10]。

ロビンズらの反対にあって，フランクフルト学派はLSEにアジールを獲得できず，やがて小さなロンドン事務所もたたみ，パリからアメリカへと放浪するほかになかった。それは犠牲の大きい旅であった。社会研究所の所員はばらばらとなり，ベンヤミンのように，命を落とすものもあった。

6）以上，Martin Jay, *The Dialectical Imagination*, pp. 9–30.『弁証法的想像力』，9–36ページ。

7）Isaac Kramnick and Barry Sheerman, *Harold Laski : A Life on the Left*, 1993, p. 321.

8）クレスゲ，ウェナー編，嶋津格訳『ハイエク，ハイエクを語る』名古屋大学出版会，2000年，80–81ページ。

9）Lancelot Thomas Hogben, 1895–1975. フェビアン協会員で，第一次大戦の良心的兵役忌避者として，投獄の憂き目にもあったホグベンは，世界各地の大学を転々とした後，1930年にLSEの社会生物学の教授となったが，しかし，居心地が悪かったからであろうか，数年後（1937年）にアバディーンの自然史の教授に転じた。けれども，以後も職は安定しなかった。主著は『百万人のための数学』（1933年），『市民のための科学』（1938年）で，我が国でも翻訳され一時期よく読まれた。

10）ベヴァリッジによれば，最初の寄付のあと，1925年9月に15万5千ポンド（優先用件，宿舎，製本，カタログ，政治経済学専任講座に充てる），1927年1月に50万ポンド（社会科学のための自然的基盤学の研究と近代社会条件の研究），20万ポンド（国際法講座を含む国際研究），17万5千ポンド（図書館と主題カタログ）を受け入れたことになっている。こうしてオーリン・ヤング，マリノフスキーが採用された。そして社会生物学講座の設置は，教授会での長い議論のあと正式に決まったと述べている。Lord Beveridge, *Power and Influence*, pp. 177–78, 250.

社会研究所に関係があった学者でイギリスに亡命したのはボルケナウ，コルシュ，ベーアであった。コルシュもベーアも早世し，ロンドンに永住できたのは，フランツ・ボルケナウ（Franz Borkenau）だけである。彼はロンドン大学の社会人教育部門の国際政治学を教えるポストを得た。

ボルケナウは，力作『封建的世界像から市民的世界像へ』を書き上げ，1934 年に社会研究所の叢書の一冊として出版していた。それは，デカルトに代表されるような抽象的で機械論的な哲学は，マニュファクチュア段階の資本主義の抽象的人間労働の発生と密接に関連があるというテーゼを説くものであったが，出版当時は好評で迎えられ，パスカルに代表されるジャンセニズムの研究であるリュシアン・ゴルドマンの『隠れた神』と比較されたという[11]。我が国でも戦後翻訳され，広く読まれた[12]。

彼は数年後にスペインを訪問し，内乱の実情をつぶさに見て，以前から次第に兆していた共産主義への嫌悪感をさらに強め，『スペインの戦場』（1937 年）を書き，学派の論集『権威と家族に関する研究』（1936 年）に最後の寄稿をして，研究所と袂を分かつことになる[13]。

フランクフルト学派の受け入れ問題について，ロビンズの『自伝』からは，前述のこと以上には分からないが，しかし，社会研究所の支部は一時的ではあるが活動し，また学派の蔵書も来た。その所有権は，いったんはチューリッヒの「社会学研究協会」に渡ったが，ロンドン・スクールに譲渡された[14]。フランツ・ノイマンが蔵書の整理にあたったらしい。ドイツにあって労働法の専門家として活躍していたノイマンもまた祖国を離れ，いまやロンドン・スクールで，ハロルド・ラスキとカール・マンハイムの指導を受けて，政治学の研究を進めていたが，彼は文庫の面倒を見るように委任されたのである[15]。

マンハイムは，アメリカに渡ることなく，ロンドン・スクールに定着した。ハンガリーに生まれ，ブダペスト大学，パリ大学，ハイデルベルク大学などで学んだカール・マンハイム（1893–1947）は，1925 年にハイデルベルク大学私講師となって，「知識社会学」の構築に邁進し，1929 年には名著『イデオロギーとユートピア』を出版している。本書が現代の社会科学に広範な影響を与えたことは周知の通りである。これによって国際的な名声を確立したマンハイムは，フランクフルト・アム・マイン大学の社会学教授に迎えられた。しかし，ホルクハイマーは本書を激しく批判した。その理由はジェイによって検討されているが，要するにマンハイムの知識社会学は歴史主義の伝統を越えることはできず，「批判理論」ではなく伝統的理論に留まっている[16]という趣旨であった。

マンハイムもまたユダヤ人教授として 1933 年にナチスによってドイツを追われる。彼は前

11）Martin Jay, *The Dialectical Imagination*, p. 16. 荒川幾男訳『弁証法的想像力』みすず書房，1975 年，17 ページ。

12）水田洋他訳『封建的世界像から市民的世界像へ』みすず書房，1965 年。

13）Martin Jay, *The Dialectical Imagination*, p. 38. 荒川訳，45–46 ページ。

14）Rolf Wiggershaus, *The Frankfurt School*, Polity Press, 1994, p. 110. ウィガーハウスによれば，1932 年の末から翌年にかけてだというが，ベヴァリッジとの交渉は 1933 年で，しかもロビンズの言うように，この交渉が実らなかったとすれば，蔵書の受け入れがいつどのような経過で始まったのか，必ずしもはっきりしない。

15）Ibid., p. 223.

16）Martin Jay, *Permanent Exiles, Essays on the Intellectual Migration from Germany to America*, Columbia University Press, 1986. マーティン・ジェイ，今村仁司他訳『永遠の亡命者たち』新曜社，1989 年，130 ページ。

述のように，幸いにもロンドン・スクールの社会学のポストに迎えられ，1947年に急逝するまで，この大学で社会学と教育学の研究と教育に没頭し，生産的な業績を生み出した。マンハイムには弟子がいないと言われるが，それは比較的短命であったことにもよるであろう。

マンハイムとは対照的に，ノイマンは，結局，イギリスに馴染めなかった。彼は，1936年――この年はケインズの『一般理論』が刊行された年で，ニュー・ディールの絶頂期でもあった――にアメリカに渡っている。彼はフランクフルトからコロンビア大学――亡命者の受け入れに積極的であった――に拠点を移したホルクハイマーの社会研究所に腰を下ろした。彼はやがてマルクス主義的な階級視点に立った経済分析を機軸とするナチズム分析の名著『ビヒモス』（1942年）を書き上げる。本書は社会経済学的分析によって国家独占資本主義と一体のナチズムと社会主義的帝国主義としてのスターリニズムを明確に峻別した点などにおいて，両者を一括して大衆社会後の人間疎外の極北と把握する，ハイデッガーの弟子ハンナ・アレントの『全体主義の起源』（1951年）と対照的な著作であった。

Ⅱ　ロンドン・スクールの伝統の形成

ロビンズは，ウェッブ夫妻やベヴァリッジ，バーナード・ショーが創設に貢献したロンドン・スクールの自由を誇りとしていた。その設立の経緯からして，ロンドン・スクールはフェビアン主義の牙城であったかのように見なされているけれども，フェビアン協会からは独立した学問研究の自由がそこにはあったというのがロビンズの主張である。学問研究の自由は，政治活動の自由までは意味しないとしても，思想の自由を意味するであろう。

ロビンズは，スクールでの師として，とくにドールトン，ラスキ，キャナン，ウォラスの四人を挙げている。毀誉褒貶の甚だしいラスキについて，ロビンズは当然のように厳しい批判の目を向けてもいるけれども，しかし彼には美徳もあったことを認めている。ハイエクをはじめとして，ラスキをまるで悪魔でもあるかのように断罪することが近年は流行りである[17]が，それは適切な評価であろうか。暗雲立ち込める1930年代に，労働党の論客であったラスキが，ソ連を支持して共産党寄りになるのは確かであるが，彼はアメリカのニュー・ディール政策にも注目しており，自らが信奉するに至ったマルクス主義とニュー・ディール政策を自分のなかでどう調停できるかに腐心しつつ，「危機にある民主主義」，「文明の危機」を救う方途を真剣に模索していたのではなかっただろうか[18]。

ラスキはロンドン・スクールでのロビンズの最初の師であった。ロビンズとベヴァリッジとの関係もきわめて重要である。ハイエクはベヴァリッジを，経済学をまるで知らなかったと切って捨てているが，そのような評価はロビンズのものではない。ハイエクはケインズについても首尾一貫性がなく，思いつきが目立つとして断罪している。「知の傲慢」を戒めたハイエク自身がいささか傲慢ではなかっただろうか。このような一方的な決めつけは，結局は抹殺につながり，学問と思想を豊かにしないであろう。潔癖さも徳であるが，それも過ぎると不毛となる。ラスキの業績を丸山真男は有効に参照し自らの政治学に援用した。

ラスキはいっそう左傾化し，30年代にはますますマルクス主義の信奉者となった。こうしてLSEにおいて，ロビンズやハイエクのような個人主義者，あるいは自由主義者と，ラスキのよ

17）　例えば，水谷三公『ラスキとその仲間――「赤い30年代」の知識人』中公叢書，1994年。

18）　Henry Pelling, *America and the British Left*, London : Adam and Charles Black, 1956, pp. 143-45.

うな社会主義者，ないし共産主義者との対立が次第に拡大し，明確化していった。校長ベヴァリッジは両者の深まる対立を調停しようとしたが成功しなかった。

若き精鋭ロビンズは，1923年に最優等クラスの学位を得て，1925年から母校の講師となっていた。同じ時期に，同世代のモーリス・ドッブ（Maurice Dobb, 1900–76）が，ケンブリッジでの学業を終えてロンドン・スクールに来ている。1922年に共産党に入党していた彼は，エドウィン・キャナンの指導を受けたのち，1924年にケンブリッジの講師になって帰っていく。ロビンズは『自伝』で親しく接したキャナンを温かく回想しているが，ドッブへの言及は一切ない。ロビンズは，キャナンのもとで研究に従事したドッブとまったくのすれ違いだったはずはないであろう。現にロビンズはドッブの書評を書いているのである。

ドッブは大学院での研究成果を『資本主義企業と社会進歩』として1925年に刊行した。そこで彼は現代の経済理論が，分析対象を経済構造ではなく価格現象に限定していることを批判し，階級的基礎と独占の分析が必要であると主張した。その翌年に，ロビンズは本書を書評して，彼のマルクス主義的独占理論を論難した[19]。このような自由主義とマルクス主義の対抗は，もとより問答無用の排除ではなかった。多様な要素が共存し，現実の的確な分析と理論的卓越，そして問題解決の処方箋をめぐって競い合うことが，学問の発展にとっても社会の発展にとっても重要な条件であるが，そのような稀有な場が当時のLSEには形成されつつあったように思われる。しかし，ウェーバーの指摘を待つまでもなく，理論的，思想的寛容と政治活動は別物であった。

タルコット・パーソンズ（Talcott Parsons, 1902–79）がアメリカからLSEに来たのはこの少し前で，彼は1925年にはハイデルベルク大学へ移り，そこでウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』に出会った。パーソンズはその英訳を1930年に出版し，英語圏にウェーバーの業績が紹介され，ここから英語圏でのウェーバー研究は盛んになっていく。

ロビンズは，1929年にロンドン・スクールの経済学教授となった。いまだ31歳であった。1929年の秋のウォール街の株式暴落で，未曾有の経済危機が始まった。大不況をどのようにして乗り越えることができるのだろうか。社会主義は無傷に見えていた。資本主義には未来があるのか知識人は疑問にとらえられた。ケンブリッジの使徒会のエリートにもマルクス主義が浸透してきた。

ロビンズはマルクス主義にひかれることはなかった。教授就任後1961年まで30年あまりその地位にあって，ロビンズはロンドン・スクールを経済学の拠点にすべく奮闘した。社会主義的な教授たちと交流しつつも，彼は自由主義者，個人主義者として一貫した姿勢を保持した。ロビンズの『自伝』を読んで印象深いのは，理念への献身を放棄した社会主義者の堕落に対する彼の激しい憤りである。公共への貢献，いわばシヴィック・ヴァーチューの発揮をロビンズは自らの行動の原理としていた。

危機の1930年代はロンドン・スクールの充実の時期でもあった。すでにその中心にいたのはロビンズであった。プラント，ハイエク，ヒックス，カルドアからルイスまでの人事を推進し，ハイエクとの共同のセミナーを開講し，ミーゼス，デニス・ロバートスン，ヴァイナーなどの著名な外国人経済学者をゲスト講師に招いて特別講義を組織するとともに，ケンブリッジ大学との間に親密な関係を構築するといった具合に，ロビンズは縦横に活躍した。

19）Stuart Macintyre, *A Proletarian Science : Marxism in Britain 1917-1933*, Cambridge U. P., 1980, p. 170.

ナチスによる大陸でのユダヤ人抑圧が，ロンドン・スクールの学派としての発展に貢献したのは歴史の皮肉である。同じように，ユダヤ知識人のアメリカ合衆国への亡命は，第二次大戦後のアメリカの学問と思想にきわめて大きな生産的な影響を与えた。それについては多数の詳細な研究がある。しかし，それに先行して，第一次大戦後，1917年から19年にかけてのハンガリー革命の失敗による，ワイマール共和国やオーストリアなどへのハンガリーの知的エリートの亡命があったが，それはあまり研究されていない[20]。ハンガリーの知識人にはあまり馴染みのない人物が多いが，ルカーチ，マンハイム，ポランニ兄弟もそのなかにいた。遡ると，ヨーロッパでは，知的エリートの迫害，亡命が学問と思想の拠点の移動を引き起こすことは，決して稀なことではなかった。17世紀のフランスのプロテスタント（ユグノー）の弾圧は，オランダなどへの彼らの亡命を引き起こし，オランダの学問思想の興隆に寄与した（ピエール・ベールやルクレールなど）し，イングランドにおける非国教徒の差別は，アメリカへの人材の流出を引き起こした（ピルグリム・ファーザーズ，プリーストリなど）。抑圧されたアイルランドの知識人は，イングランド，スコットランド，そしてアメリカへと亡命した。

イタリアではムッソリーニのファッシスタ党による反ファッシズム運動に対する弾圧は1926年には強化され，反ファッシズムの地下新聞『クアルト・スタート』（第四身分）を出したカルロ・ロセッリ（Carlo Rosselli）はジェノヴァでの講義を禁じられたし，ファッシズムに一貫して反対した歴史家ガエターノ・サルヴェミーニ（Gaetano Salvemini）はロンドンに亡命し，その後アメリカに渡る。さらにロセッリもグラムシも反政府活動で逮捕され，5年の禁固刑に処せられる。こうした流れのなかで，ケインズの招聘を受けてスラッファがケンブリッジに行く（事実上の亡命）のもこの年である[21]。

1933年にはハンブルク大学のヴァールブルク文庫がロンドンに移転し始めた。オランダのライデン大学が受け入れを申し出たが，資金がなかったので受け入れに成功せず，結局，フェアハム卿，コートールド卿などが資金面等で支援したロンドン大学に文庫は来た。これはルネサンス美術を中核とする（新プラトン主義，占星術，錬金術，カバラ文書などの）膨大なものであった。付設の研究所の初代所長はゴンブリッチであった。ハンブルク大学時代にカッシーラーがルネサンス研究を行えたのは，この文庫のおかげであった。1936年に研究所がロンドン大学に設置され，6万冊（一説には12万冊）に達する膨大な蔵書も収納された[22]。

こうして戦後のLSEの基盤はこの時期に大きく整備された。それにはアメリカの貢献もあった。第一次大戦後，世界最大の富裕国となったアメリカはヨーロッパの経済と文化の復興を支援し始めていた。イギリスの知識人もアメリカの富に引き付けられた。トーニーなどLSEの教授たちも，アメリカへの招待講演には喜んで出かけ，高額な謝礼を受け取ったと言われる。

1933年以降のドイツ・オーストリアからの亡命者との交流は，新しい要素の導入であった。ジェヴォンズやウィックスティードの経済学にこそ親しんでいたが，ロビンズは，マーシャル

20）Lee Congdon, *Exile and Social Thought, Hungarian Intellectuals in Germany and Austria 1919-1933*, Princeton University Press, 1991.

21）Jean-Pierre Potier, *Piero Sraffa-unorthodox economist (1898-1983), A Biographical Essay*, Routledge, 1991, pp. 19–20. ノルベルト・ボッビオ，馬場康雄・押場靖志訳『イタリア・イデオロギー』未来社，1993年を参照。

22）ゴンブリッチ，鈴木杜幾子訳『アビ・ヴァールブルク伝』晶文社，1986年366–68ページ。

を中心とするケンブリッジの経済学の伝統に必ずしも親しんでいなかった。そうした段階で，大陸からの亡命者の受け入れに関係したことで，大陸の経済学を受容し，ケンブリッジとは異なる独自の特徴のあるロンドン・スクールの経済学の伝統が形成されていった。大陸が失った人材は，LSE などの学問を活性化したのであるから，それは皮肉なことであった。

ロビンズは，ハイエクをはじめとしてミーゼス，カントローヴィッチなどに共感に満ちた関心を示したし，オイケンの人格も尊敬していた。ドイツ歴史学派の遺産と新古典派経済学の総合を目指していたオイケン（Walter Eucken, 1891–1950）は LSE に出講中に他界した。ロンドン・スクールはこうして国際的な経済学研究の拠点となったが，それはロビンズの努力の成果でもあった。ロビンズたちは，海外から多くの優れた経済学者を招聘した。前述した以外に，マハループ，リンダール，オーリン，ナイトなどが来て，講義を行った。オーストリア学派，北欧学派，シカゴ学派などの独自性を持ち始めていた経済学の諸潮流が，ロンドン・スクールをいわば「ターミナル駅」として交流したのであるが，それには自然の流れ，意図せざる結果も手伝ったが，明らかにロビンズの努力にも負うのである。

ロビンズが，自由主義的な国際的協調と連携にコミットしたのは，全体主義への反対は言わずもがな，明らかに国際共産主義運動への警戒，反ソ連，すなわち左翼全体主義への反対という意味が込められていたように思われる。しかし，そうだとしても，ロビンズがフランクフルト学派の「批判理論」を理解していたかどうか疑問であるし，またスペイン内戦にどのような見解を抱いていたかも分からない。人民戦線の神話が知識人をとらえた。スペイン内戦では，ケンブリッジの学生たちが，フランコの独裁と戦うべく，スペインの人民戦線に義勇兵となって加わる。スペインで戦死したジョン・コンフォードの写真はケンブリッジのすべての進歩派の暖炉の棚に飾ってあった，とホブズボームは述べている[23]。

左翼知識人は概してロビンズをあまり評価しないように思われる。例えば，LSE に学んだジョン・サヴィル（1916–）はロビンズに対してきわめて辛辣で，こう述べている――ロビンズの講義は巧みではあったが，その内容は現代社会に関係がなかった。戦後の彼の認識もさほど変化はなく，間違った単純な思想を伝えていた。知れば知るほどロビンズが嫌いになった。C・A・スミスが『クレア・マーケット・レヴュー』にハイエク批判を書いたとき，ロビンズは「コスモポリタン協会」（亡命学生を支援する集まり）で行う予定であった講演をすぐに反故にした。ロビンズは権威主義者であった。彼は同じ部局の見解の違う人間の人生を不幸にすることがあった，とカルドアがインタヴューで述べている。ロビンズ委員会の評価は高いが，彼はかならずしも自由主義的な寛容と共感をもった議長ではなかった。ハイエクもロビンズについて，後に，「彼には実際に独創的な思想はほとんどなかった」と述べており，その発言をダーレンドルフがロンドン・スクールの 100 年史で引用したが，ロビンズよりハイエクが理論家として洗練されているとされていた，と[24]。――最左翼のサヴィルがロビンズをこのように酷評するのは，いささか公正さを欠いているかもしれない。

23）ホブズボーム，河合秀和訳『わが 20 世紀・面白い時代』三省堂，2004 年，114 ページ。

24）John Saville, *Memoirs from the Left*, The Merlin Press, 2003, pp. 6–7.

Ⅲ　アジールの移動―イギリスからアメリカへ

フランクフルト学派が，正式の手続きを経て，LSEに避難場所を見つけることができていれば，その後のイギリスの社会科学はどうなっていただろうか。これは興味深い問いである。学派の批判理論は，いまだ形成途上にあったが，マルクスとウェーバーの経済学や社会学などの社会科学だけではなく，フロイトに始まる心理学，精神分析学，ルカーチ以来の美学，大衆文化批判，フッサールに始まる現象学などの最新の学問成果を批判的に摂取し，高度化した資本主義社会の文化と病理に鋭い批判的考察を展開し始めていた。それはやがてフランスの構造主義に影響を与えるが，もしイギリスにも学派の学問が十分に継承され，イギリス経験主義の学問的伝統と深く対決させられたならば，社会の学問の生産的な融合に導いたかもしれなかった。少なくとも，学派のマルクス主義的な社会哲学はイギリスのマルクス主義的歴史学と生産的な対話ができたのではなかっただろうか。あるいはマルクス主義を共通の基盤とするにしても，哲学（理論）と歴史は，結局，手法を異にする和解の困難な分野として，批判的な対峙を続けるだけであったかもしれない。後年のE・P・トムスンのアルチュセール批判が推察させるのは，そのような不毛な事態である。

しかし，トムスンは対決すべき相手を間違っていたのかもしれない。西欧マルクス主義は哲学的伝統の批判的再検討において多くの成果をもたらしていた。なるほどアルチュセールは認識論的切断というガストン・バシュラールの用語を借りて初期から後期へのマルクスの思想的転回を解釈し，スピノザの唯物論とモンテスキューの相対性（→矛盾の重層的決定）の世界解釈を再評価しただけであったかもしれない。しかし，ルカーチはウェーバー，ジンメル，ディルタイやラスクの影響を受けて，『歴史と階級意識』を書いた。グラムシはクローチェとの批判的対話を通じて『獄中ノート』を書いたが，彼の思想の中心にあったのはマキァヴェッリである。ゴルドマンはパスカルに光を当て，アドルノとホルクハイマーはシェリング，マルクーゼはシラーの美学に注目した。ルカーチが回避したニーチェはアドルノ，サルトル，マルクーゼ，アルチュセールが好んで論じた。フロイトは彼らの共通の遺産となった。デラ・ヴォルペと弟子のコレッティはアリストテレス，ガリレオ，ヒュームの子孫としてマルクスを解釈し，ルソーの政治思想を評価し，ヘーゲルを批判した。もちろん，ルカーチとマルクーゼはヘーゲルに光を当てたが，サルトルはキルケゴールをヘーゲルに対置し，マルクスによる乗り越えが20世紀になってから化石化に陥ったと論じた[25]。

しかしながら，「一国社会主義」が勝利し，コミンテルンが官僚制化するにつれ，西欧マルクス主義者は，それぞれの国の大学教授におさまり，国を越えて学問的交流を行う言語能力と余暇も持ちながらも，ますます地域化し，外国の思想的発展に目を向けなくなった。ペリー・アンダースンが批判するように，1920年代から1960年代にかけての西欧マルクス主義者たちは，国境を越えて，真剣な国際的な研究交流を行わず，相互に無視し合ったのである[26]。こうした学問と思想の国内化は，雪解けまでの西欧，いや世界の潮流であった。

そのような方向にイギリスも向かっていたように思われる。「ドイツにおけるマルクス主義の牙城」のロンドン・スクールへの影響をロビンズは警戒したのであるが，本当にどの程度恐

25）　さしあたり，Perry Anderson, *Considerations on Western Marxism*, NLB, 1976, pp. 55–67.

26）　Perry Anderson, *Considerations*, pp. 68–69.

れたのだろうか。LSE がフランクフルト学派を擁護し，彼らの影響力がイギリスにおいて大きくなったとしても，体制変革には結びつかなかっただろうし，戦後には，結局，故国ドイツのフランクフルトに帰還したであろう，と相当の確信を持って言えるから，ベヴァリッジの決断を容認し，学派を受け入れても構わなかったのではないか。しかしながら，今でこそそう言えても，それは後知恵で，そのような予測を当時のロビンズたちに期待するのはおそらく無理であっただろう。もちろん，学派のその後の成果を考えると，受け入れはむしろ学問研究の活性化をもたらしたのではなかったかと思われるのだが，それも現在からの結果論にすぎない。

当時の時代状況を考えると，ロビンズやハイエクにとっては「理論と実践の統一」を掲げるマルクス主義者の組織をそっくり受け入れることは，危険と判断されたであろう。フランクフルト学派の批判理論に代表される西欧マルクス主義は「理論と実践」の統一といった単純な言葉で要約できるような革命的マルクス主義ではなかったとしても，そのような理解はロビンズたちにはできなかったであろう。

イギリスはプロテスタント国家になって以来，「陰謀」や内乱，革命によって幾度となく打撃を受けてきた国である。アイルランド共和国軍のテロも今でこそ終焉したが，ながくイギリスを脅かしてきた。自由を樹立するために大きな犠牲を払ってきたイギリスでは，共産主義革命の温床となるような組織は警戒しなければならなかったであろう。しかも，福祉国家のイギリスのどこに解放されるべきプロレタリアートがいたか。しかし，マルクスに活動の自由を与えたのもイギリスであった。イギリスほど思想の自由を尊重してきた国はない。

思想の自由に加えて，多様な人材と研究手段としての蔵書・資料があることは，人文社会科学の研究にとって，いな自然科学にとってさえ決定的に重要な条件である。研究者は英国図書館のように，充実した資料，優れた研究手段のあるところを求めて，旅をし，仕事をする。学問の拠点がこうして生まれる。

フランツ・ノイマンのコロンビア大学時代の弟子であったスチュアート・ヒューズ――彼もフランクフルト学派に関連があった――によれば，1930 年代のイギリスの教育機関は総じてアメリカより閉鎖的で，知的亡命者を受け入れたというものの，実際に受け入れたのは，大部分が文学者か古典学者で，社会科学者は一握りにすぎなかった[27]。しかし，そのなかで LSE は例外であった。ローラ・フェルミはこう書いている。

> ファッシズムが勢力を得ると，ヨーロッパ各国の経済学者や学生たちはロンドン・スクール・オブ・エコノミックスに集中した。この学校は当時ウィリアム・ベヴァリッジ卿が学長をしていたが，彼はヨーロッパの迫害された知識人を救済するために組織的救援活動の先頭にたった。30 年代半ばには，G・L・S・シャックルが書いているように……不運や迫害に追われた人々，そうではなくて普通に訪れた大きな流れに含まれるすぐれた人びとが，あらゆる方面からそこへ注ぎこみ，きわめて多彩な思想をもちこんだ[28]。

1930 年代にケンブリッジにいたマルクス主義者，ホブズボーム（1917–）は休暇をロンドン・スクールで過ごすことが多かったらしい。当時まったく無名で無視されていたノルベルト・エ

27）　スチュアート・ヒューズ，荒川幾男・生松敬三訳『大変貌：社会思想の大移動　1930–1965』みすず書房，1978 年，29 ページ。

28）　ローラ・フェルミ，掛川トミ子・野水瑞穂訳『亡命の現代史』2，みすず書房，1972 年，140 ページ。

リアス（Norbert Elias, 1897-1990）――ときに『文明化の過程』をスイスで出版準備中であった――が大学構内をうろついていた，とホブズボームは記している。そして彼もまたこう書いている。「1930年代のイギリス学界は，古典学や物理学のような世間に認められている分野で活動している者でなければ，中央ヨーロッパ出身のユダヤ人と亡命者の才能に対しては，およそ盲目だった。彼らに居場所を与えたのは，おそらくLSEだけだった。」もっとも，ホブズボームは，奇妙にもLSEの経済学は「当時は，というよりもつねに，ケンブリッジほどは傑出していなかったし，やる気もなかった。非常に頭の良い才能を持った若者を何人か引き付けたが，残念ながら彼らはホートン通りでは永続的なポストを得られなかった」とも指摘している[29]。いささか辛口ではある。

フランクフルト大学でマンハイムの助手を務めていたエリアスもまた，ナチスの脅威を避けて1933年にパリに避難し，マンハイムを頼ってであろうか，35年にはイギリスに渡った。エリアスはナチズム（野蛮）を生み出したヨーロッパの文化の根源と，ありうべきその対抗軸を求めて，中世からの長い過程としての「文明化」を歴史的に跡付けた『文明化の過程』を1939年に出版した。彼は生活様式の文明化が行動と感情の洗練と深く関係しており，文明化（野蛮の克服）は複雑な過程であることを明らかにしている。彼の母は1941年にアウシュヴィッツで犠牲になった。

オックスフォード大学もユダヤ系の亡命知識人を少数ながら受け入れていた。フランクフルト学派の重鎮アドルノはその一人である。彼は1934年に改めて学生としてマートン・コレッジに入り，『心の哲学』などで知られるギルバート・ライルの指導を受けて，フッサール現象学について博士論文を書くことになった。アドルノは，彼以前に，1933年にドイツから亡命してオックスフォード大学に来ていたマールブルク学派のカッシーラーの助手になる期待を抱いていたのであったが，その期待は幻想に終わった。

亡命生活のなかで，生活の安定した拠点を確立できなかったからか，学問的生産力を失いつつあったカッシーラーは，ほどなく35年にはスウェーデンのイェテボリ大学の教授となり，41年にはイェール大学，44年にはコロンビア大学に転じたが，その翌年に急逝している。

アドルノは1937年にポール・ラザーズフェルドの誘いに応じて渡米し，プリンストン大学でマスコミ調査に携わることになる[30]。プリンストンにはアインシュタインも来る。ハイエクも戦後になると，ロンドンを去り，アメリカに渡って，ヴァイナーやフランク・ナイトがいたシカゴ大学に迎えられ，そこで後期の社会哲学体系の構築に没頭する。

ドイツ，オーストリア，ハンガリーなどのユダヤ系知識人は，イギリスに亡命しても，このように，結局はアメリカに再渡航していくことが多かった。1927年にウィーンで出会っていたドラッカーとカール・ポランニもそうである。ドラッカーは1933年にドイツからロンドンに来たが，37年に合衆国に渡り，イギリスの新聞に寄稿する傍ら『経済人の終焉』（1939年出版）を書いていた。ハンガリー出身のポランニもまたウィーンを経て，イングランドに亡命するが，労働者教育協会の夜間学校で教えたのち，アメリカに移り，ベニントン大学の研究員となって『大転換』（1944年出版）を書く。二人の交友は濃密であった[31]。

この全体主義の時代に，経済人類学が形成され始めたのは偶然ではない。スターリニズムの実態は知られていなかったが，市場経済も経済

29）ホブズボーム『わが20世紀・面白い時代』，124ページ。

30）イエーガー，大貫・三島共訳『アドルノ　政治的伝記』岩波書店，2007年，143-48，167-68ページ。

人の理念も，もはや時代遅れと思われていた。1930年代の全体主義の時代経験のなかで，経済学は転換を模索していたのである。その転換は，ケインズやポランニなどによって多様な方向で遂行されていたが，自由放任市場経済はもはや維持できないという認識が出発点にあった。自由市場経済はヨーロッパやアメリカでも危機にさしかかっていたから，この時期に自由市場経済を擁護したハイエクなどはむしろ例外であった。

1930年代のドイツでは，ナチスの登場と同時期に，ナショナリストとしてのフリードリヒ・リスト復興があり，我が国でも1930年代から40年代にかけて社会主義はおろか，自由主義も排撃され始めていたから，スミスやマルクスに代わって，リストが注目を集めるようになる。「暗い谷間の時代」に，治安維持法によって，言論出版の自由は抑圧され，自由な研究は抑圧されたから，リストが自由な精神によって読まれたわけではないことは，言うまでもない。大学教授たちも国家総動員体制に向かう時流との危うい関係のなかに置かれていた。公然と体制に反対を表明することは危険で命に関わった。

したがって，軍国日本に対して，いかにして抵抗を試みるかということが良心の問題となった。この点では，日本とイギリスはまったく違っていた。戦時中に，板垣與一，大塚久雄，大河内一男，高島善哉，住谷悦治，白杉庄一郎などがリストを読んで，しばしば，「奴隷の言葉」で論稿を執筆せざるを余儀なくされていた。自由主義や市場経済は禁句となり，国体，報国，統制等が「神様言葉」となって，学界を制約していったのである。

この時期のイギリスの知識人たちは，一方では，次々と「ソヴィエト連邦との恋」に落ち，熱狂的な称賛を惜しまなかった。1936年5月に創設されたゴランツ，ストレーチーとラスキの「レフト・ブック・クラブ」[32]がこうした熱狂を助長していた。クラブは，フランスにおいて実現したレオン・ブルムの人民戦線のような，ファッシズムに反対する人民戦線の形成を目論んでいたわけではなかった。戦争，ファッシズム，貧困にまつわる時代の根源的な問題について考える手がかりを市民に与え，彼らの間に暗黒に立ち向かう連帯感情を生み出すことが目的であった。それは社会主義への方向を見つめた市民運動であった。

しかしながら，多くの知識人には国家社会主義とスターリンのソ連はまったく正反対のものと映じていた。後のアレントのように，両者ともに危険な独裁であり，全体主義であるとは見えていなかったのである。ウェッブ夫妻もバーナード・ショーも，そしてラスキもソ連に魅せられた。アメリカの左翼もソ連と恋に落ちた。ジョン・リード・クラブや『新しい大衆』（1929年創刊），フィリップスとラーヴの『パーティザン・レヴュー』（1934年創刊）などがその代表である[33]。アメリカでもイギリスでもソヴィエト連邦の新しい文明を称賛する本や論文が続々と出たのである。クリストファ・ヒルはソ連共産党に招かれ，モスクワで研究生活を送っていた。

ロンドン・スクールの共産党員は，この時期に20数名から90人近くまで増え，1937年から38年にかけてピークだった，とジョン・サヴィルは回想している[34]。

この時期の日本でも，多くの知識人がソ連と

31）Daniel Immerwahr, “Polanyi in the United States Peter Drucker, Karl Polanyi, and the Midcentury Critique of Economic Society,” in *Journal of the History of Ideas*, 70-3, July 2009, pp. 445-466.

32）John Lewis, *The Left Book Club : An Historical Record*, Victor Gollanz : London, 1970. 鈴木健三訳『出版と読書　レフト・ブック・クラブの歴史』晶文社，1991年。

33）堀邦維『ニューヨーク知識人　ユダヤ的知性とアメリカ文化』彩流社，2000年，第3章。

34）John Saville, *Memoirs from the Left*, p. 8.

の恋に落ちた。治安維持法によって，左翼は弾圧されていたが，日本資本主義論争が示すように，半封建的・半絶対主義的な軍国主義の日本でも，希望の光を求めた知識人にとって，社会主義とソ連への期待感は大きかったのである。『日本資本主義発達史講座』の刊行は1932年に始まった。暗黒の時代にあって，知識人たちがその実態をよく知らぬままソ連に憧れたのは，当然の成り行きであった。根底には人間の善良性への信頼があった。労働者国家は輝いて見えた。ラーゲリ（強制収容所）はまったく知られていなかった。人間の善良性への信頼は，ユダヤ人虐殺，ラーゲリ，原爆投下などによって粉砕されるが，それはまだ先のことである。

したがって，知識人のいささかナイーヴな社会主義・共産主義信仰には批判の余地があったとしても，彼らがソ連と恋に落ちたのは無理からぬことであった。後にスターリニズムの支配に無感覚であったからという理由で，あるいはまた社会主義の失敗という既成事実の上に立って，彼らを一方的に断罪できるであろうか。重要なのは結果だけではない。意図（心情倫理）もまた重要であり，結果（責任倫理）から直線的に意図まで断罪するのは暴力的であろう。しかし，我が国の左翼知識人は，戦後になっても，ソ連への幻想が冷めたとき，今度は，毛沢東による文化大革命の中国や金日成の主体思想の北朝鮮に憧れの対象を求め，やがてまた失恋したのではなかったか。そのような心情は詩から訣別したロビンズには無縁であった。

Ⅳ　ロマン主義から現実主義へ

ロビンズは，ワーズワースの詩句を愛唱しつつ，ロマン主義的な詩を書いた青年であったが，とうに社会主義の夢から覚め，現実主義的な自由主義者となった。もとより，理念や理想をすてたわけではないけれども，以来，彼は左翼知識人の「熱狂」を共有しなかった。もちろん，右翼の「狂信」を共有したはずもない。社会主義経済計算論争に直接参加しなかったものの，計画経済の困難を十分に認識していたロビンズは冷静で醒めていた。外国や外部に夢を求め，そのユートピアに過剰にのめりこむという若い日の知識人にありがちの，ロマン主義的，あるいは理想主義的メンタリティを，ロビンズはとうに払拭していたのである。

ロビンズはすでにイギリス経験論の本流を継承するリアリストであった。リアリストは行き過ぎると懐疑主義に陥る傾向があるが，それはロビンズには無縁であった。現実主義者ロビンズは，必要な場合は果敢に行動した。独裁者ベヴァリッジは1937年にスクールを去るが，ベヴァリッジの引退の件で，自由主義者ロビンズはベヴァリッジより左翼に位置したラスキと協力した。ロビンズはもちろん孤独であったわけではなく，彼には，盟友ハイエクがいた。

ケインズと対決した保守として描かれることの多いハイエクについて，彼と自分は自由への献身という点で強い連帯感を抱いていたとロビンズは語っている。ハイエクが仲介してやってきたカール・ポッパー（Karl Popper, 1902–94）については，あまり語っていない。オブライエンの指摘するように[35]，ロビンズはフリードマンの実証経済学の定義も，ポッパーの反証主義も退けた。ポッパーはハイエクのセミナーで『歴史法則主義の貧困』の骨子を報告していた。そこにはロビンズもシャックルもいたらしい[36]。ロビンズがポッパーについてあまり語らないのはなぜであろうか。

イギリスの「大学人支援会議」（ウォルター・アダムズ）の世話で，1937年に，ヒットラーの

35）　*The Economic Journal*, 98, March 1988, p. 108.

36）　ポパー，森博訳『果てしなき探究―知的自伝』岩波現代選書，1978年，151ページ。

侵入を予想しつつ，オーストリアからポッパーはニュージーランドのクライスト・チャーチのカンタベリー大学に移り，当地で『貧困』や『開かれた社会とその敵』の執筆を開始している。両著作は全体主義と権威主義的思想から自由を守ろうとするものであった。当時カンタベリー大学の学生であったポーコック（J. G. A. Pocock, 1924-）はポッパーの講演を聴いているが，ハイエクの働きかけで，ポッパーがLSEに移ったのは1946年1月のことであった。

ロビンズは，1930年に，J・M・ケインズ（1883-1946）が議長を務める経済諮問会議の委員に選ばれ，若くして公共政策に関与した。しかし，ロビンズはケインズの逆鱗に触れることになった。政府への勧告のうち，二点についてロビンズが同意しなかったのである。それは不況期における公共支出の増大策と輸入自由化政策であった。ロビンズは，前者については自分の間違いを認めたが，後者については間違っているとは認めなかった。

ロビンズは，経済理論の体系的著作――イギリス人がTreatiseと呼ぶもの――を残さなかった。それに代わって，名著『経済学の本質と意義』と題した小著を刊行した（1932年）。

また，彼が『経済計画と国際秩序』（1935年）で経済ナショナリズムを分析し，『階級闘争の経済的基礎と政治経済学論集』（1939年）でマルクス経済学と真剣に向きあったのは，この時期のことである。労働運動にも関与してきたロビンズは，マルクス主義的な階級概念は空想的であると喝破し，現実に作用しているのは様々な利害集団，特権であると把握した。もちろん，ロビンズにとって望ましいのは，平等で公正な社会であった。

やがてロビンズは，1941年から45年まで，戦時内閣官房（War Cabinet Secretariat）経済部門の部長となる。この時期はドイツ，イタリア，日本などの同盟国はいうまでもなく，それに対抗する必要上，アメリカとイギリスを含む連合国においても，程度の差こそあれ，国家総動員体制が進行していた。戦時動員は，ロビンズを戦時内閣，経済官僚などと深く関わらせることになった。そうした政府への関与をハイエクは知識人の堕落として批判するであろう。ハイエクは中央による計画化の論理，国家総動員体制を批判する『隷従への道』（1944年）を書いて，やがてフランク・ナイトやジェイコブ・ヴァイナーのいたシカゴへと転じる。しかし，経済学者としてロビンズが，祖国と自由のために，戦時経済政策に関与しないことはありえないことであった。

ロビンズは，ヘミング，アンダーソン，ジュークスなどの経済官僚たちとともに，首相，大臣を頂点とする戦時内閣が直面していた経済問題について，調査と勧告を行った。とくに戦後の国際秩序や，生産の統制と配給制の問題が重要な課題であった。ロビンズたちは，戦時内閣に深くコミットすることによって，いわば官庁エコノミストの先駆となったのである。

1934年にロビンズは『大不況』を刊行した。その2年後の1936年にケインズの『一般理論』が出版された。ロンドン・スクールの書店（ブラックウェル書店）に列を成して人々が『一般理論』を買い求めたが，自らその一人であったと知的亡命者の一人であったハーシュマンは書いた[37]。ロビンズが『一般理論』をどう受け止めたかは必ずしも明らかではないが，次第にロンドン・スクールにもケインズの影響が浸透してくるなかで，ロビンズも柔軟になっていく。

前述のように，1930年から，ロビンズはケインズと一緒に仕事をする機会があり，彼の天才的な仕事ぶりに付き合い，彼の激しい感情に振り回された。戦後の国際秩序の青写真を描いた会議におけるアメリカとの折衝の，苦難に満ち

37）ハーシュマン，拙訳『方法としての自己破壊』，法政大学出版局，2004年，122ページ。

たドラマチックな展開を導いたのは，ブレトン・ウッズ会議でのケインズの絶望的な努力であったが，それが彼の死の原因ではなかったか，とロビンズは推察している。ロビンズは，ケインズをサポートして，1943年にはホット・スプリング，1944年にはブレトン・ウッズ会議にイギリス代表として出席し，戦後の国際経済秩序の構築に寄与し，また英米借款協定の交渉に貢献した。

『自伝』には記されていないことであるが，ホット・スプリングでの会議のあと，ライオネルは妹のキャロラインをペンシルヴァニアに訪問したことも記しておこう。

義理の兄弟姉妹を別として，ライオネルの兄弟姉妹のうち，生き残ったのはライオネルとキャロラインだけであった。ロビンズ家はバプティストであったが，キャロラインはバプティストの信仰を受け入れなかった。ライオネルもまた，母と妹の相継ぐ死の衝撃から信仰を失った。やがて兄が青春のロマン主義詩から別れて経済学者を目指したとすれば，妹は共和主義詩から共和主義思想史へと進んだ。ロイヤル・ハロウェイから1926年にロンドン大学の博士課程に進んだキャロラインは，17世紀の詩人で共和主義者であったアンドルー・マーヴェルの研究を行ったが，この年に渡米してミシガン大学の歴史学のリッグズ研究員（Riggs fellow）となっている。

当時，中産階級の独身女性がアメリカに渡ることは稀なことであった。なぜ妹はアメリカに渡ったのだろうか。イングランドで研究職を得る可能性はないと判断したからであろうか。キャロラインはミシガン大学から，ペンシルヴァニア州の名門女子大，ブリン・マー・カレッジ（Bryn Mawr College）に移ってパーマネント・ポストを得た。州都フィラデルフィアは，啓蒙の時代から共和主義的な国際都市であったが，この地の大学で，彼女は18世紀イングランドの共和主義思想（ないし民主政治思想）の研究を進め，その成果は画期的な大著『18世紀のコモンウェルスマン』として，やがて1959年に刊行され，その後の英米思想史研究に大きな影響を及ぼすことになった[38]。

ブリン・マー・カレッジには，マイネッケの弟子で，マキァヴェッリやグイッチャルディーニの研究などで知られるフェリックス・ギルバートが16年間在職した。キャロラインと交友があっただろう。彼もまた亡命者としてロンドンからアメリカへと渡った。「ドイツの知的亡命者はイングランドに来た最初の1，2ヶ月は当地で職を求めて必死とならないことはほとんどなかった。」[39] しかし，ギルバートも研究も災いしてイギリスでは職を得られずにアメリカに渡ったのであった。

38）Caroline Robbins, *The Eighteenth-Century Commonwealthman*, Harvard University Press, 1959. それは今日のポーコックを頂点とする共和主義研究の直近の知的源泉となった。キャロラインのブリン・マー・カレッジでは，アイザイア・バーリンが1952年に「ロマン主義時代の政治思想」と題するメアリー・フレクナー講義を行った。それは1950年の学長キャサリン・マクブライドの招待に応じたものであった。この4回の講義のなかでバーリンは，初めて「消極的自由」と「積極的自由」の概念の区別を行った。キャロラインがこの講義を聴かなかったはずはないと思われるが，そうだとしても，それがキャロラインにどのような影響を与えたかは，今は不明である。バーリンの講義録はマルクスの『グルントリッセ』にちなんで，バーリンの『要綱』と呼ぶべきものとして編集されて刊行された。Isaiah Berlin, *Political Ideas in the Romantic Age, The Rise and Influence on Modern Thought*, ed. by Henry Hardy, with an introduction by Joshua L. Cherniss, Princeton University Press : Princeton and Oxford, 2006（paper, 2008）. 以下も参照。Michael Ignatieff, *Isaiah Berlin, A Life*, Metropolitan Books, New York, 1998, pp. 201–202. 石塚雅彦・藤田雄二訳『アイザイア・バーリン』みすず書房，2004年，220ページ。

39）Felix Gilbert, *A European Past. Memories 1905-1945*, Norton, 1988, p. 171.

ブレトン・ウッズでは，妹夫婦がライオネルに会いにフィラデルフィアから来た。6月25日の日記は，朝食をドイツ社会民主党の修正主義者，エドワルト・ベルンシュタインと一緒にとり，昼食は妹夫婦と一緒したことが記されている[40]。この年から翌年にかけて，兄妹はさらに何度か会っており，国際情勢を含めて様々な意見交換を行った模様である。

戦後のロンドン・スクールの再建過程は，新しい世代の経済学者の登場とともに始まったが，ロビンズは戦後に豊穣な成果を残した。大学院の充実とシカゴのヴァイナーとの交流，講座の増設，デニス・ロバートスン，自身の古典派研究の進展とトレンズの著作との出会い，雇用政策，貿易収支問題，ヨーロッパ統合問題，フランス，アメリカ，ソ連の動向，いかにして国際協調を実現していくかといった事柄がロビンズの問題であった。

J・S・ミルを尊敬していたロビンズは，ド・ゴール将軍，サルトルたちフランス知識人の反米主義に苛立ちを抱いた。モンテーニュ，ラシーヌ，トクヴィルのフランス，その偉大な知的伝統を尊敬し親しんできたロビンズにとって，フランスの反米主義は，世界の秩序を不安定にするものであった。戦中から戦後にかけて，アメリカと対抗して，ソ連を中心とする東側が次第に勢力を拡大していく。この時期にも，そうした社会主義勢力に加勢するマルクス主義者やそのシンパサイザーが，知識人のなかでは，ますます増加していた。彼らに対抗して自由主義経済学を磐石なものにすることが，ロビンズの課題であった。

40）*The War Time Diaries of Lionel Robbins and James Meade 1943-45*, 1990, p. 159.